２０２４．９．８（日）使徒１８：１８～２２

18:18 パウロは、なおしばらく滞在してから、兄弟たちに別れを告げて、シリアへ向けて船で出発した。プリスキラとアキラも同行した。パウロは誓願を立てていたので、ケンクレアで髪を剃った。
18:19 彼らがエペソに着くと、パウロは二人を残し、自分だけ会堂に入って、ユダヤ人たちと論じ合った。
18:20 人々は、もっと長くとどまるように頼んだが、パウロは聞き入れず、
18:21 「神のみこころなら、またあなたがたのところに戻って来ます」と言って別れを告げ、エペソから船出した。
18:22 それからカイサリアに上陸してエルサレムに上り、教会にあいさつしてからアンティオキアに下って行った。

＜説教＞

先主日には、コリントで主が地方総督ガリオを用いて、パウロをユダヤ人たちによる危害から守ってくださったことを見ました。「パウロがユダヤ人の律法に反するやり方で神を拝むように人々をそそのかしている」とユダヤ人たちはガリオの法廷に訴えました。それに対してガリオは、パウロがローマの法律に違反しているのなら当然裁判をするが、ユダヤ人の律法に関する問題なら自分たちの間で解決するべきだ、として裁判をしませんでした(12-17)。心一つにしてパウロに反抗して訴えたユダヤ人たちは地団駄（じだんだ）踏んで悔しがったでしょうが、ローマ帝国の権力には逆らえませんでした。こうして主はローマ法とその執行者をも用いてパウロを守ってくださいました。パウロは、なおも反抗するユダヤ人たちからは嫌われ、反対されたでしょうが、それはキリスト故の困難、苦しみとして甘んじて受けたことでしょう。彼はコリントに〈なおしばらく滞在して〉(18)みことばを語ることに専念しました。

そんなパウロでしたが、いよいよコリントの〈兄弟たちに別れを告げて、シリアへ向けて船で出発〉することにしました。〈シリア〉はパウロを（当時はバルナバと共に）第２回伝道旅行に送り出した〈アンティオキア〉(22)があった地方、（ローマ帝国の属州）でした。〈カイサリア〉や〈エルサレム〉(22)もここでは広い意味で〈シリア〉に含んでいるのかもしれません。コリントからは〈プリスキラとアキラも同行し〉ました(18)。シリアに船で行くにはエーゲ海と地中海を通ります。その船に乗るための港が、コリントから東に 11 ㎞ほど行った〈ケンクレア〉(18)という町にありました。

〈パウロは誓願を立てていたので、ケンクレアで髪を剃った〉(18)とあります。〈髪を剃った〉ことから、このときの〈誓願〉は、〈主のものとして身を聖別するため特別な誓い〉をして立てる〈ナジル人の誓願〉（民数記 6:1-21）と非常によく似ています。ただし、ぶどう汁を飲まない、ぶどうの実の生ものも干したものも食べないとか様々な〈ささげ物〉をパウロがどうしたとかは全く書かれていないので、それがユダヤ教どおりの〈ナジル人の誓願〉だったかどうかは分かりません。ただ確かなことは、パウロが神に何か特別な誓いを立て、祈っていたことということです。その誓いと祈りが具体的にどんなことだったかは分かりません。おそらくは、福音宣教に関すること、そして今まさに離れようとして

いるコリントの他、これまで訪れて来た地域の教会、またはこれから向かおうとしているエルサレムやアンティオキアの教会に関することだったのでしょう。

そしてこの〈誓願〉を立て、〈髪を剃る〉ということは、何らか〈その地方にいるユダヤ人たちのため〉(cf.16:3)だったかもしれません。つまり、福音の真理を歪めない範囲で「ユダヤ人にはユダヤ人のようになった」「律法の下にある者のようになった」(Ⅰコリント 9:20)ということです。こうして〈誓願〉の期間を無事終えたパウロは自分を〈神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として〉(ローマ 12:1)改めて神に献げた者として船に乗って出発したのでしょう。

さてケンクレアを出た船はエーゲ海を東に横断してエペソに着きました(19)。パウロはかつて〈アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられ〉(16:6)、「マケドニア人の懇願」の幻を通して、神によるマケドニア伝道の召しを確信してアジアからヨーロッパに行きました(16:9−10)。そのパウロが再びアジアに戻って来ました。そのアジア州の首都エペソに着いたパウロは早速プリスキラとアキラの〈二人を残し〉て〈自分だけ会堂に入って、ユダヤ人たちと論じ合〉いました(19)。論じたことは、いつものように、聖書に基づいて、キリストの苦しみと死者の中からの復活であり、イエスこそがそのキリストであるということの説明、論証(17:2−3)だったに違いありません。

さて、そういうパウロと論じ合ったユダヤ人たちが、ここではなんと珍しいことに(!)、パウロに〈もっと長くとどまるように頼んだ〉のでした(20)。これはこれまでは確かに聞いて信じるユダヤ人がいるにはいましたが、それ以上に多くのユダヤ人がパウロに反対して立ち上がり、迫害し、パウロを排除しようとすることが何度もありました。しかし今度のエペソの会堂のユダヤ人たちは〈もっと長くとどまるように頼んだ〉、ということはもっとパウロの説明、論証を更によく聞きたいと願ったということでしょう。ユダヤ人のほうからそんなことを言って来るなんて、こんなチャンスは滅多にないことだったでしょう。「かつてはアジアでみことばを語ることを禁じなさった聖霊が、ついにアジアの首都エペソにお導きになり、ユダヤ人たちの心にもお働きになって福音を聞くようにしてくださっている。このチャンスを逃す手はない。」そう考えても不思議ではありません。

しかし、〈パウロは聞き入れ〉ませんでした(20)。そして〈「神のみこころなら、またあなたがたのところに戻って来ます」と言って別れを告げ、エペソから船出した〉のです(21)。「せっかくユダヤ人たちが引き留めてくれているのに。彼らの気が変わらないうちに、彼らの願うとおりに長くいて福音を語りたい」とパウロの「人情」は一時でも訴えたかもしれません。しかし「今はそれは神のみこころ(御意思)ではない」、また「今は急いでエルサレムに行くのが神のみこころだ」という確かな「聖霊の禁止」、または「御霊の示し」(cf.19:21)が何かの形でやはりあったのでしょう。パウロは確かに「みこころが…弛でも行われますように」(マタイ 6:10)、「わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるままに、なさってください」(同 26:39)、「なたのみこころがなりまうように」(同 26:39)と祈り願い、神に従っていました。パウロにとっては〈神のみこころ(御意思)〉こそが最善であり、絶対でした。〈神のみこころ〉に従えば、神が成し遂げてくださる、〈神がすべてのことを働かせて益としてくださる〉(ローマ 8:28 欄外注)ことを確信していました。どんなに人から迫害され妨害されても〈神のみこころなら〉とどまり、どんなに人から好かれたり心配されたりして引き止められても〈神のみこころなら〉きっぱりと

振り切って去って行きました。パウロとしては〈アジアでみことばを語る〉こと、〈またあなたがたのところに戻って来〉ること、それは願っていたことでした。しかしそれが実現するか否か、また自分が行うか否か、それらはただ〈神のみこころ〉によること、〈神のみこころに〉従うべきことでした。

私たちもそんなパウロの「信仰の従順」に学び習う必要があります。そもそも〈神のみこころ〉が何なのか分からないことも多いのですから、もっと聖書を読み、祈り〈神のみこころ〉を知る必要があります。また、何かについて〈神のみこころが〉が分からないのなら、やはり聖書を読み、祈り、そしてその上で人からも意見を聞いて、とにかく〈神のみこころ〉を知る必要があります。そして、何よりも、既に〈神のみこころ〉と明確に示され、教えられ、知らされていることについては今すぐに従うことです。いつまでもぐずぐずして従わないでいるのは何のためにもなりません。神の恵み、あわれみなる主イエス・キリストに信頼して〈神のみこころ〉に聞き従う歩みをさせていただきたいと願います。